

試練と共に、逃れる道をも備えられていることに信頼し

学院長 嶋田 順好

宮城学院の 134 年にわたる長い歴史を振り返ると、この度の新型コロナウイルス感染症や東日本大震災のときよりも厳しい試練と苦難を受けた時代があったことを知らされます。それは 1941 (昭和 16) 年 12 月 8 日から 1945 (昭和 20) 年 8 月 15 日まで 3 年 8 カ月もの間、日本がアメリカ合衆国や連合国と戦争をした時代です。まさに筆舌に尽くしがたい試練と苦難の時代でした。なによりも国家の威信をかけ、総力を傾け武力で相手を殲滅せんとして際限なく憎しみと敵意を増幅させ続ける悲劇の時代でもありました。それはまた言うまでもなく宮城学院の存立の基盤、内的な生命が危機にさらされる時代でもあったのです。

戦争が始まる直前、日米関係がどんどん悪化するなか、米国人のクリーテ校長は辞任せざるを得なくなり、30 年以上も教え続けたハンセン先生やリンゼイ先生も帰国を余儀なくされます。もちろん、礼拝も、聖書の授業も、英語の授業も禁じられました。それでも日本と母国アメリカが戦争するはずがないと信じて日本に留まっていた 6 名の宣教師の先生たちは、12 月 8 日、真珠湾攻撃で戦争が始まったことも知らずに学校に出てきて、なんと日本人の先生方からその事実を告げ知らされたのです。その日のうちに敵国人として元寺小路のカトリック教会に設けられた強制収容所に入れられ、交換船で母国に戻るまで、厳重な監視下に置かれます。その時の驚き、その時の悲しみ、その時の苦悩はいかばかりであったことでしょうか。愛する生徒たち、愛する日本と祖国アメリカが戦争を始めたのですから。文字通り生木が裂かれるような痛みを襲われたに違いありません。

当初は破竹の勢いで勝ち進んだ日本軍も、圧倒的な物量にまさるアメリカ軍によって次第に追い込まれ敗色が濃くなっていきました。1943 (昭和 18) 年 10 月には鉄不足のため校舎のスチーム暖房器も取り外され、暖房のないなかで学びを続けることになりました。更に 1944 (昭和 19) 年 4 月頃からは、生徒たちも軍需工場で勤労奉仕をすることになります。11 月には 4-5 年生約 200 名全員に、遠く横須賀海軍工廠への出動命令が下りました。横須賀では小学校校舎に薄い畳を敷いただけの粗末な宿舍が与えられました。毎晩、「しらみ」や「のみ」に悩まされ、食事も豆かすのまざったご飯と味のない汁ものだけで、ひもじい思いのなか特攻機「桜花」製造の重労働に明け暮れたそうです。

1945 (昭和 20) 年 4 月からは 3 年生も多賀城海軍工廠に動員されて銃や弾薬の製造に関わることになりました。そして 7 月 10 日には B29 による仙台空襲があり、本校の 3 名の生徒も犠牲者となりました。9 つあった美しい立派な校舎も、講堂と第 2 校舎のみを残してすべて破壊され、8 月 15 日の終戦の日を迎えることになったのです。

日本とアメリカが総力をかけて戦ったのです。双方に多くの犠牲者が出ました。日本だけでも 300 万人以上が犠牲となる悲しみと痛みが残りました。戦争が終わった後、なお互いに敵意を抱いて憎しみ合ったとしても不思議ではありません。しかし、戦前から宮城女学校で教え、生徒を愛したクリーテ、リンゼイ、ハンセン、ニコデマス、ポーターという先生方は、戦後いち早く仙台に戻り、新たに加わった多くの宣教師の方々と共に、宮城学院の復興のために献身的に心を注いでくださったのです。そのことによって仙台における宮城学院の名声、ことに英語教育の評価は揺るぎないものとなりました。このほかにもアメリカの多くのキリスト者たちが、校舎再建のための支援に動き、多額の募金を寄せてくださったことも忘れてはならないことでしょう。

まさしく「敵を愛し、自分を迫害する者のために祈りなさい」(マタイ 5 章 44 節) との主イエスの御言葉を、宣教師の先生方は、身を挺して生きられたのです。このような宣教師の皆さんの愛に基づく献身があればこそ、宮城学院は危機の時代を乗り越え、今日あるを得ていると言えるでしょう。そうであれば私たちもまた、その志を継承しつつ、「神は真実な方です。あなたがたを耐えられないような試練に遭わせることはなさらず、試練と共に、それに耐えられるよう、逃れる道をも備えていてくださいます」(コリントの信徒への手紙 I 10 章 13 節) との御言葉に信頼し、園児、生徒、学生、院生のために最善をなしつつ、今この時の試練に雄々しく、望みをもって立ち向かってまいりましょう。